

閑な老人

尾崎一雄

閑な老人

尾崎一雄

中央公論社

閑な老人

©一九七二 定價 一一〇〇圓

著者 尾崎一雄 發行者 高梨茂 昭和四十七年
十二月二十日初版發行 昭和五十四年四月三十
日四版發行 印刷所 三陽社 發行所 東京都中央
區京橋二一八一七 中央公論社 振替東京二一三四

村祭り

七

松風

四七

家の周り

八一

苔

一〇七

閑な老人

一三一

寫眞のこと・その他

一五七

寫眞（昭和三十二年十二月撮影）

石井幸之助

装幀

芝本善彦

尾崎一雄
作品集

閑な老人

村
祭
り

一

夕食を攝^とつてゐると、部落會場の方から太鼓の音が起つた。昨日も今頃始めたな、一昨夜はどうだつたかな、などと考へながら、聞き慣れたその音をぼんやり耳に入れる。

夕食をすまし、テレビを少し見てから、夕刊をもつて自分の部屋に引上げる。そこは茶ノ間から小部屋二つへだてた北側にあるので、祭り囃子^{ばやし}の音が急にはつきりしたものになつた。茶ノ間では、太鼓の音に消されてよく届かなかつた笛も鐘も聞えた。何枚かの夕刊を、ぞんざいに讀む。讀むといふほどでもない。なんとなく紙面に目をはなつてゐる、といったぐらゐのもので、それよりも私の意識は耳の方へ傾いてゐる。

た。

「駄目だな」と獨りごとが出た。茶ノ間に居る時分から、大太鼓おほどの、ときどき間まを狂はせるのが氣になつてゐた。小太鼓こだいこ（締め太鼓）は四人ぐらゐらしいが、これはまアまアと言へる。しかし、それを締めていく大太鼓の奴がときどき間を外す。

二軍だらうな、と考へる。あれがレギュラーだつたら醜態だ、と急に心配ごとが出来たやうな氣分になつた。屋臺が竝ぶと、競演のやうな具合になるからだ。

今年（昭和四十四年）の祭禮には、屋臺が五つ出るといふ話である。家の前うちまへの往還を、北へ五十米ほどのつき當りにある宗我神社では、四月と九月に祭りがあつたが、四月は小祭で形ばかりのもの、秋のが大祭で、この日は奉納神樂から村芝居も盛り澤山にある。いはゆるタカマチも出てなかなかの賑にぎはひだ。しかし、ここ何年かは、氏子中の屋臺が全部出揃ふといふことはなかつた。

それが今年は出るといふ話だ。

「これでおしまひかも知れません。みんなさう思つてます」と、祭り世話人の一人である隣家の主人が言つた。

「すると、屋臺もこれが見納めですか」

「それぞれの村うちでは引張り廻すでせうが、お宮へ勢揃ひするつてのは、今年限りになりさうです」

五十代のその人は、若いうちからの祭り好きだつたにしては、案外感情拔きの調子だつた。

「やつぱりご時世ですか」私は平凡過ぎることを言つた。

「さういふことでせうね。つまり、屋臺を引張る手が足りないんです、若い連中が勤めに出ちやつてるもんですから。それと、交通事情ですね」

宗我神社を總鎮守とする七部落の祭り世話人は、再々寄り合つたことだらう。いろいろ話し合つた上で、今年を最後と五臺の屋臺を連ねることにしたのだらう。隣家の主人は、今更そのことについてくどくど言ふ氣は無い様子だ。

私の住むあたりは、小田原市の一部にはなつてゐても、依然として農村である。七部落ひつくるめて、田よりも畠の方が多く、各種果樹の栽培がさかんで、割合裕福だ。農作業に機械力がとり入れられ、昔より人手がはぶけるので、壯年者にも若者にも、勤め人がふえた。だが、離村といふことはない。人口は増加してゐる。

それなのに、屋臺を曳く手が足りないのは、勤め人が多いといふ目に見える理由のほかに、若い人たちにその氣が無い——無い、が言ひ過ぎなら、氣乗り薄になつたといふことがあるのだ。若者ばかりではない、壯年の人たちだつて、さして熱意は示さぬのが實狀である。

年一度の大祭にはめを外し、騒ぎを満喫する——そんな氣持は、もう無くなつてゐるのだ。昔と違ひ、今では、手取り早い娛樂施設がいくらでもある。四時^{せいじ}をわかつたず楽しむことができる。京濱方面への通勤者通學者の多い地域故なほさらである。

差し迫つてはゐないが原稿を書く仕事はある。それはあと廻しにして本を讀んでもいい。しかし私は、そのどつちにもとりかかることができなかった。祭り囃子の、ときどき狂はせる間が氣になつてならないのだ。

私は、時計と煙草とマッチを袂に入ると、立ち上つて玄關の方へ行つた。その鍵を振ち明けながら、

「ちよつと散歩してくる」と、妻の居る茶ノ間へ向けて怒鳴つた。こんなに遅く、とか、どこまで、とか言つてゐる聲をうしろに、私はとつと往還の方へ歩き出してゐた。立上る前に見た時計は、九時を少し過ぎてゐた。

つき當りの神社の玉垣に添つて右折、それから左折、さらに右折すると道は神社をうしろに東へ向ふ。約百米先の北側に、部落會場があつて、すべて硝子戸になつてゐる南面は、締められてゐるが明るく、何人かの者の立つてゐるのが素通しに見える。

私は窓硝子一枚を少し開けて中をのぞき込んだ。四人の若者が窓の方に向けて小太鼓を並べ、一心に撥ばちを振つてゐる。立つてゐて、外から見えたのは、大太鼓、すり

鐘、笛などをやつてゐる者たちだつた。

笛吹き側の側にあぐらをかいてゐた四十過ぎの男が、あ、といふ顔をして立ち上つた。入口の戸を開けて、

「先生、どうぞ」と言つた。

私は、少しばつの悪い思ひをしながら上り込んだ。私を呼び入れたのは、神社の東北隣りに住むHといふ鳶職人で、何かといふと駈けつけてくれる實直な男だつた。

私もばつが悪かつたが、囃子の練習をしてゐる連中も、何となくテレくささうな様子だ。彼らは、誰からともなく手を休めてしまつた。とんでもない彌次馬の出現と思つたに違ひない。

私はにこにこ顔をして見せて、

「うちで聞いてゐたら、ふらふらと來たくなつちやつて……僕にも叩かせて貰ひたいんだけど——」

「へえ、先生がこれ、叩けんですか！」